氏名	小林　翔
学位	博士（英語学）
学位記番号	乙第39号
学位授与年月日	2023年3月23日
審査研究科	外国語学研究科
論文題目	The Effects of Synchronous and Asynchronous ICT-based International Interactions on the Affective Variables and Speaking Skills of Japanese English Learners
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授　静　哲人
	（副査）大東文化大学准教授　フランソワ・ルーセル
	（副査）大東文化大学教授　田口　悦男
	（副査）埼玉大学教授　及川　賢

小林　翔　博士論文　審査報告

1. 著者経歴

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされております。ご了承ください。

2. 論文の概要

本論文は小林氏が一貫して追究してきたテーマに係る 5 本の査読付き公刊論文と 4 本の海外での口頭発表（本文書末に資料として掲載）の内容を、改めてひとつのまとまった論考として構成しなおしたものであり、以下のような 11 の章から成っている。

Chapter 1. Introduction
Chapter 2. Literature Review
Chapter 3. The Present Study
Chapter 4. Study 1: The Effects of Unscripted and Scripted Methods on Speaking Anxiety during Video Call Conversations: A Comparative Examination
Chapter 5. Study 2: A Practical Report of the Impact of Skype-based Video Chats on Speaking Anxiety and Speaking Skills in Improvisation and Preparatory Groups
Chapter 6. Study 3: Transforming Speaking Anxiety and Enhancing Speaking Skills among Learners with Poor English Proficiency through a Skype-based Video Chat: A Case Study Approach
Chapter 7. Study 4: A Practical Report of the Use of a Skype-Based Video Chat to Improve Speaking Skills and Nurture Willingness to Communicate
Chapter 8. Study 5: A Change in EFL Learners' Speaking Anxiety: Focusing on Collaborative International Exchange Using ICT
Chapter 9. Study 6: The Impact of Synchronous and Asynchronous Computer-mediated Communication on International Posture
Chapter 10. General Discussion
Chapter 11. Conclusion

以下、章ごとに概要を記す。

第1章　導入

1.1 では導入として、学習指導要領が英語で話す力を重視しだした流れを受けて勤務校で導入したオンライン英会話の授業で、あらかじめスクリプトを準備する方法で実践した他教員の授業を観察したところ思うような結果が出ていなかった、という観察を契機として、様々な熟達度を持つ日本人 EFL 学習者集団のためのよりよい ICT 活用法を探るという本研究の着想に至った経緯を描写する。1.2 と 1.3 で現行学習指導要領では即興性のあるやりとりをするスピーキング力の養成を謳っているものの中学校・高等学校の現場ではそのような実践は比較的少ないこと、それは即興的な活動に対する不安に根ざしていることを指摘する。この問題を解決するために 1.4 と 1.5 では即興的なやりとりの成功体験をもたせることの重要性、そのための有力な手法として CMC (コンピュータ・ネットワークを介したコミュニケーション) の利用により目的・場面・状況を意識した会話や異文化に触れるため、成功体験や自信を構築させ、不安の軽減に繋がることが期待できるとする。

第2章　先行研究レビュー

本論文の理論的支柱となる第二言語習得理論のインタラクション仮説とアウトプット仮説について触れ、意味重視のインタラクション実現のための CMC の利点を述べている。関連して「発達の最近接領域」(ZPD) や足場かけ (scaffolding) に触れ、不安に関する先行研究を概観し、情意面の概念である WTC (Willingness To Communicate) と IP (International Posture) に関する先行研究をレビューしている。

次に ICT の歴史的背景を概観し、同期型 CMC (参加者が同時に集まってコニュニケーションする形式) と非同期型 CMC (電子メールやブログなど時間差のある形式) の区別を提示する。同期型 CMC はやりと

りの真正性が高い一方、英語が苦手な学習者にとっては難度が高く参加者の不安も大きい。非同期型CMCは時間的制約からのプレッシャーがなく、動画ベースのやりとりであるならばテキストベースのやり取りよりもスピーキングに近い。以上の先行研究概観に基づき、小林氏は同期型のビデオ通話および非同期型の録画ビデオによる交流に着目する。

第3章　本研究

本論文全体を通した研究課題として以下の3つが提示される。

1) 同期型のICTを活用すると、様々な校種の英語学習者の情意面（不安、WTC、IP）とスピーキング力にどのような影響を及ぼすか。
2) 学習者の情意面（不安、WTC、IP）とスピーキング力に影響を与えた要因は何か。同期型のICTをどのように活用すると、学習者の情意面（不安、WTC、IP）とスピーキング力の改善が期待できるか。
3) 同期型のICTと非同期型のICTを併用することは、不安とIPの改善を促進させるか。効果があるとしたら、その要因は何か。

次章からのStudy 1～Study 6は、これら3つの研究課題に関連して参加者のレベル（年齢)や活動タイプの組み合わせを変えながら実施したものである。なお査読結果待ちであるStudy 3以外の5本は英語教育学会誌に査読つきで公刊された内容をもとにしている。

第4章　Study 1

英語を得意とする高校生34名のスピーキング不安がどの程度あるのかを調査し、フィリピン人講師との10カ月間の1対1のオンライン英会話の環境において、原稿を準備しない即興群と原稿を準備する準備群に分けて、指導前後の効果を比較検証し、その方法の違いがスピーキング不安に及ぼす影響について検証したものである。優れた英語能力を有している生徒でもスピーキング不安が高いが、1対1のオンライン英会話を長期的に続けることでスピーキング不安の軽減に役立つことが明らかになった。しかし即興群と準備群の不安の軽減に差は見られなかった。

第5章　Study 2

英語を得意とする大学生4名を準備型2名と即興型2名に分け、英語のネイティブ講師と1対1のオンライン英会話を1ヶ月間実施した。検証の結果、短期間であっても、即興的に取り組むことで不安を軽減でき、スピーキングの流暢さ、複雑さ、正確さの向上に効果が見られた。振り返りレポートから、1対1の状況だと不安が下がると感じ、講師に自分の英語が伝わった経験が自信につながることがわかった。チャット機能の利点も認識されていることがわかった。1対1の半構造化インタビューから、原稿に依存しないように即興で練習するほうがスピーキング力向上に効果的だと認識していることが明らかになった。

第6章　Study 3

英語を苦手とする大学生1名を対象に、フィリピン人講師と即興的な要素を取り込んだ1対1のオンライン英会話を1カ月間実施した。1対1の半構造化インタビューから、コミュニケーションを繰り返すことによる慣れ、ゆっくりとした発話や講師の優しい雰囲気、短いフィードバックや講師の発話例、強制アウトプットが参加者の発話を促し、チャットボックスの文字情報によるインプット修正が意味理解を促進させ、スピーキング不安を軽減することがわかった。さらに刺激回想法から、講師からのフィードバックが発話や意味理解を促進し、講師の発話例が足場かけとなること、慣れるにしたがってアウトプットが相手に伝わった成功体験が不安の軽減、スピーキング力の向上につながることが確認された。

第7章 Study 4

小学生34名を対象に日本と海外 (マレーシア、オーストラリア、ロシア、インド) の教室を繋ぎ、お互いがどこの国にいるか質問して推測し合う Mystery Skype と呼ばれるコミュニケーション活動を複数回実施し、参加児童の WTC とスピーキング力への影響を検証した。質問紙とスピーキングテスト結果から、熟達度に関わらず WTC とスピーキング力を向上させることに有効であることがわかった。さらに自由記述の回答の計量テキスト分析の結果、英語で相手と話し合う楽しさや相手を意識したコミュニケーションの大切さに気づき、異文化に対する理解を深め、英語学習への意欲を高めることが示された。

第8章 Study 5

適切なタイミングに応じてクラス間で共有でき、準備してから発信する機会も担保できる非同期型 Flipgrid (今日、世界中の教育関係者が色々な国々の学生間の交流に使用している、動画を簡単に撮影・編集・共有ができるアプリケーション)の活用を検証した研究である。大学生17名を対象に、一斉指導の状況下において、日本と海外 (オーストラリア) の教室を繋いだ即興的な要素を取り込んだ同期型のビデオ通話1回と、その後に非同期型の Flipgrid を1週間継続した。英語を得意とする多くの学習者はスピーキング不安を軽減させ、英語学習に対する意欲を高め、意識を変容することが明らかになった一方、英語に苦手意識のある 4 名の学習者のスピーキング不安については変化がなく不安が高いままであることが確認された。

第9章 Study 6

英語に対して苦手意識を持っている 4 クラスの高校生 158 名を対象に、一斉指導の状況下において異なる処遇が IP に与える効果を比較した研究である。日本と海外の教室を繋いだ同期型のビデオ通話とその後に続けて非同期型の Flipgrid を組み合わせた同期型／非同期型の併用群 (2 クラス) と、海外の教室と同期型のビデオ通話のみを実施した群 (2 クラス) を比較した。検証の結果、同期型と非同期型の併用により、IP の向上が見られ、学習意欲の向上に繋がることがわかった。しかしながら、同期型を 1 回実施しただけでは、IP を高めることが認められなかった。

第 10 章 全体的考察

本章では Study 1～Study 6 の結果を第 3 章で設定した全体的な研究課題に照らして考察し、研究課題毎の「答え」を記している。研究課題 1「同期型 ICT の情意面とスピーキング力への効果は？」に対しては、同期型 CMC に繰り返し取り組むことで、熟達度に関わらず不安を軽減し、WTC、スピーキング力を向上することが示唆された、とする。研究課題 2「影響を与えた要因は何か？」については、強制アウトプットや、チャット機能とグループワークが足場掛けになって意味交渉を促進させ、成功体験に繋がることが判明した、とする。研究課題 3「同期型と非同期型の併用の効果とその要因は何か？」については、同期型のビデオ通話後に非同期型の Flipgrid でやり取りすることで、意味理解を促進させて肯定的な経験に繋がり、不安と IP の改善を促進することが示された、とする。

第 11 章 結論

ICT を活用した同期型の環境で、即興的に英語でやり取りすることに慣れさせ、意思疎通ができたという成功体験を積み重ね、英語でやり取りできる自信をつけることで、スピーキング不安の軽減と WTC の向上が期待できるので、1 対 1 のオンライン英会話を取り入れるのは望ましいことが示唆されている。また、1 対 1 のオンライン英会話と一斉授業の状況下におけるビデオ通話の特徴を生かした指導法は、小学生から大学生まで様々な校種の英語学習者に適用可能であり、非同期型の Flipgrid を継続して行うこと

で、英語を得意とする学習者のスピーキング不安の軽減と、英語を苦手とする学習者の IP の向上を促進させることが期待できるため、ビデオ通話と Flipgrid を併用することが望ましいことが示唆されている。

3. 論文の審査内容および評価

3.1 テーマ設定の意義／独創性について:

すべての児童・生徒にひとり 1 台の端末を持たせそれを高速大容量ネットワークでつないだ教育に係る GIGA スクール構想が打ち出されている現在、CMC の効果的活用法に関する研究は意義が大きい。熟達度や CMC の形態の違い、即興性の有無がどう情意面とスピーキング能力に影響するかについての研究はこれまでに少なく、とくに同期型と非同期型の組み合わせの効果についての研究はこれまでにはなく、本研究はその点で独創的である。

3.2 先行研究レビューの質／量について:

第二言語習得の基本に係るインタラクション仮説やアウトプット仮説から始まり、コンピュータを介した英語指導、不安、動機づけ、WTC など、テーマに関連する分野の文献 (総引用文献数 337) を十分にレビューし、本研究の位置づけを明らかにしている。質、量ともに十分であると言える。

3.3 構成の明確さ／論理性について:

導入から先行研究のレビューにつなげ、全体のリサーチクエスチョンを提示した後、6 つの Study を記述し、最後に全体的な考察を提示する、という明快な流れで構成されている。とくに 6 つの Study は単なる列挙ではなく、各 Study で判明したことと判明しなかったことを明らかにした上で次の Study に導く、という論理的な構成が評価される。

3.4 分析手法の適切性について:

各 Study に応じた分析手法を適切に使い分けている。分散分析や t 検定などの量的分析手法だけでなく、参加者のコメントを文字起こしして生起する概念をコーディングし KHCoder (計量テキスト分析ソフトウェア) によって語句や概念の共起関係を探るなどの質的分析手法を駆使しており、トライアンギュレーションによってデータの特性を浮かび上がらせている点が特筆される。5 つの Study が査読つき公刊論文に基づいているという点も分析およびその解釈の適切性が担保されていることの傍証となる。

3.5 学問的意義／教育的示唆について:

今後の英語教育において CMC が広まってゆくことが予想される中、どのような形の CMC の中のどのような要素が学習者の不安を軽減し、結果的にスピーキング力の向上につながってゆくのかについて明らかにしたことの意義は大きい。とくに 1 対 1 の即興オンライン会話が学習者不安に与える影響を探った研究は本論文が初めてである。質的手法によって不安が軽減してゆく様相を明らかにしたことは学術的な価値が高い。また事前にスクリプトを準備して話すことが多い学校教育現場にとって、即興で話す練習の効果を明らかにしていること、またより取り組みやすい非同期型の CMC の具体的な手法を明らかにしていることは非常に貴重な教育的示唆を与えるものである。

4. 審査結論

以上の審査内容および評価に基づき、本審査委員会は全員一致で、本論文は博士学位の授与に値するものであると判断する。

以上

資料：本論文の元となった公刊済み論文および口頭発表一覧

<公刊済み論文>

Kobayashi, S. (2021a). Effects of the difference between unscripted and scripted methods on speaking anxiety: Comparative examination of video conversations. *The Japan Association for Language Education & Technology Kanto Chapter, 5*, 17–38. (Chapter 4. Study 1)

Kobayashi, S. (2020b). A practical report of Skype-based video chat to improve speaking skills and reduce anxiety in scripted and unscripted lesson groups. *KATE: Kantokoshinetsu Association of Teachers of English, 34*, 45–58. (Chapter 5. Study 2)

Kobayashi, S., Furuya, Y., & Nakagawa, Y. (2021). A practical report of Skype-based video chat to improve speaking skills and nurture willingness to communicate. *JES: The Japan Association of English Teaching in Elementary Schools Chapter, 21*, 4–19. (Chapter 7. Study 4)

Kobayashi, S. (2021b). A change in EFL learners' unwillingness to speak English: Focusing on collaborative international exchange using ICT. *ARELE: Annual Review of English Language Education in Japan, 32,* 161–176. (Chapter 8. Study 5)

Kobayashi, S., Tabuchi, K., Fukuda, T. S., & Chino, J. (2022). Synchronous and asynchronous computer-mediated communication on international posture. *KATE: Kantokoshinetsu Association of Teachers of English, 36*, 45–58. (Chapter 9. Study 6)

<口頭発表>

Kobayashi, S. (2019, August). *The effects of Skype-based video chat on students' unwillingness to speak English in scripted and unscripted lesson groups.* FLEAT 7: International Conference on Foreign Language Education & Technology, Japan. (Chapter 4. Study 1)

Kobayashi, S. (2020, December). *Comparison of a videoconferencing intervention's effects on students' English-speaking anxiety.* 2020 IEEE International Conference on Teaching, Assessment, and Learning for Engineering (TALE), Virtual Conference. (Chapter 4. Study 1)

Kobayashi, S., & Nakagawa, Y. (2021, April). *Fostering speaking ability and willingness to communicate in a low-proficiency English learner: A case study using video calls.* 1st AEJ UKI SLA Research International Conference, Virtual Conference. (Chapter 6. Study 3)

Kobayashi, S., & Tabuchi, K. (2022, March). *Effects of videoconferencing and the continuation of video discussion platform on international posture*. 56th RELC International Conference, Virtual Conference.(Chapter 9. Study 6)